



## 事例 ②

## ● 内部人材と学外ネットワークを生かす ●

# 企業や留学生同窓会と連携し グローバルなエンジニアを育成

## 福井大学

福井大学の工学部、大学院工学研究科では、地元産業界のニーズを取り込んだ実践力重視の英語教育に力を入れている。強力な応援団である留学生同窓会のネットワークは、「地方小規模大学にとって留学生こそがグローバル化のインフラ」と考え、育ててきた大学への帰属意識のたまものと言える。

### めざすは世界中で 夢を形にできる技術者

福井県は、47都道府県中人口が43位（2013年10月時点、総務省統計局）である一方で、海外に展開する企業数は16位（2011年2月時点）\*と、企業活動のグローバル化が進んでいる。地場産業の繊維産業や眼鏡産業は東アジアの企業との競争が激化しており、中小企業といえどもコスト削減、市場開拓のための国際的な展開を迫られている。そうした中、北米や欧州に進出するブランド力を持った企業も複数存在する。

福井大学はこれまで、技術者（工学部）、教員（教育地域科学部）、医師・看護師（医学部）と、3学部がそれぞれ高度専門職業人を養成することによって地域貢献を果たしてきた。近年は、それぞれの専門性に語学力を付加する教育に力を入れている。

中でも工学部は、育成すべき人材像を「Global IMAGINEER」と表現し、文部科学省に採択されたグローバル人材育成推進事業（以下、GGJ）の牽引役を担っている。

\*「アジアの活力を取り込む北陸地域における企業活動の国際化推進方策に関する調査報告書」10ページ（経済産業省中部経済産業局）

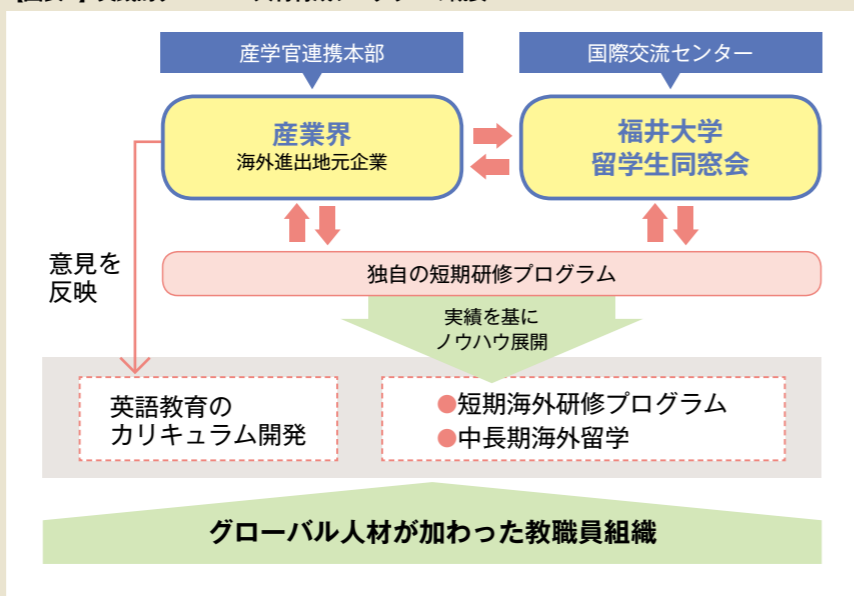
「IMAGINEER」は、「imagine（心に描く）」と「engineer（技術者）」の2語からなる造語。夢を形に変えるアイデア、人々の暮らしや自分の将来を描く想像力が豊かな技術者を意味する。GGJ採択前から掲げていたこのコンセプトに、歴史、文化、習慣が異なる地域においても「IMAGINEER」としての力を発揮できる人材であるべきとの意味を込めて、「Global」を加えた。地元企業、自治体、留学生同窓

会との連携によって実践的な教育の場を提供し、「Global IMAGINEER」を育成することが、グローバル人材育成プログラムの骨格となっている（図表1）。

### グローバル人材を次々と 教職員に採用

「Global IMAGINEER」を育成するために、全学的にも工学部独自でも、

【図表1】実践的グローバル人材育成プログラムの概要



教職員の戦略的な採用を進めている。

語学センターの教員も同様である。同センターは、語学教育の抜本的な改革によってビジネスの現場で必要とされる実用的な英語力を習得させようと、2011年度に設置。2012年、公募によって国際教養大学でアカデミック英語カリキュラム策定を主導したレーナー・アルバート教授をセンター長に迎えた。

2014年度は16人の教員がセンターに所属している。うち5人が第2言語としての英語教育学の博士号を持ち、他にも3人が取得をめざしている。「言語学や英文学を専門とする教員が英語を指導する大学が多い中で、英語教育の専門家がこれだけそろった大学は珍しいはずだ」とレーナーセンター長は述べる。

語学センター教員の国籍が、アメリカ、イギリス、イタリア、日本など多様であることも特徴の一つである。グローバル企業では、非英語圏の外国人と英語でコミュニケーションすることが多い。そうした実践の場を想定し、国や地域ごとの「クセのある」英語に慣れさせるために、意図的に教員の国籍を多様化しているという。

「学外から専門家を採用したことにより、英語教育の思い切った改革が可能になった」と述べるのは、寺岡英男理事・副学長だ。プレイメントテストによる習熟度別少人数クラス編成、授業回数の増加（週1回から2回に）、共通教育科目にも学部の専門分野を反映した実践的な授業などは、学内の教員だけでは実現できなかったという。

機械工学科、建築建設工学科の2年生の中でも英語の成績上位層が共通教育科目として受講するPBLクラスは、

【図表2】短期海外研修プログラム

分類	主な研修内容・目的	対象学年(目安)	
語学研修型	語学力の向上を目的とした研修	全学年	
文化体験・交流型	文化・歴史遺産の訪問、文化体験・交流などを通してグローバルな環境に慣れ、理解を深める	学部1、2年	
教養・専門型	グローバル教養型	特定地域の社会文化に関する講義やフィールドワーク等への参加を通して、グローバル人材としての教養を養う	学部2～4年
	専門分野型	専門分野の講義や実験への参加、関連企業への訪問等を通して専門分野への理解を深める	
実践・研究型	実践・インターンシップ型	就業体験などの実践を通して高度専門職業人としての専門性や創造性を高める	学部4年～博士前期2年
	研究・発表型	学会への参加や共同研究、発表などを通して高度専門職業人としての専門性や創造性を高める	

特徴的な授業の一つである。学生24人を2人の外国人教員が担当。2人が事前に学部の教員に相談して設定したプロジェクトを、半期のうちに3つ課す。

学生はグループに分かれ、「条件に沿った適切な照明をつくる」「眼鏡メーカーの社員の話を聞いて、販路を海外に拡大するためのアイデアを考える」といった課題について、英語のみで話し合い、発表する。企業の現場における専門分野が異なる者同士の協働を想定し、グループは学科混成。学生の成長ぶりに手ごたえを感じ、学部全体への拡大を検討しているという。

レーナーセンター長は、福井県経営品質協議会を通じて県内企業の英語教育にも携わっている。そこで聞いた経営者の声もふまえて、「産業界は英語力がある人材を求めている。工学部生は卒業後ほとんどが企業に就職するので、全員の英語力を底上げし、最低限の質保証をする必要がある」と語る。

さらに、大学院の工学研究科においても、英語教育を担当する非常勤講師の採用枠を設けており、英語による授業の経験のある教員をこれまでに4人採用。技術者として必要な表現力、コミュニケーション力を身に付ける「科学英語」の授業を担当している。今後は工学専門の教員にも外国人を増やす方向で検討しているという。

職員もグローバル人材の採用を進めている。2007年度に就任した高梨桂治事務局長はエール大学で経済学博士を取得後、アメリカの会計事務所での勤務経験もある。同事務局長の下でグローバル企業の勤務経験者、海外青年協力隊経験者を留学コーディネーターなどとして積極的に採用している。

### 福井とアジアを結ぶ 元留学生が研修を支援

習得した語学力やコミュニケーション





ン力の実践の場として、大学は短期海外研修プログラムを実施している。2013年度は17か国37コースに全学で約200人が参加した。プログラムは図表2に示す通り6タイプに分かれ、強化したいスキルによって選択できる。大学は全学生に留学を強く推奨しており、留学先の検討から帰国後の振り返りまでの道すじを示したワークノート（写真）を入学後のガイダンスでも配付し、啓発している。

これら短期留学について、実習先の開拓や提供、現地での講演や指導などを通して支援するのが留学生同窓会と福井の地元企業だ。

留学生同窓会は、中国、東南アジア、欧州など世界13支部にわたり、約1500人の会員を擁する。中国の西安支部では西安理工大学の学長、副学長を筆頭に30人近い教員が会員に名を連ねる。上海支部には企業経営者20数人など、現地の第一線で活躍する人材が豊富だ。福井の産業界にも、アジアを中心に支社や現地法人を展開している企業が多い。留学生が福井の企業に就職し、出身国の支社等で働く例も珍しく

ない。

2008年度から行われている「スプリングプログラムin上海」は、留学生同窓会、地元企業、大学が密接に連携した短期海外研修プログラムである。博士前期課程進学予定の工学部4年生と工学研究科の学生が対象。2週間かけて、中国の言語、歴史、文化に加え、海外企業の経営や技術戦略を学ぶ。

協力しているのは上海理工大学、留学生同窓会上海支部、企業の現地展開をサポートする福井県上海事務所、化学メーカーの日華化学（株）をはじめとする県内企業である。上海理工大学の研究室に所属し、英語で研究を進める「海外研究プレゼンテーション・討論」、留学生同窓会会員をはじめとする企業経営者が講義する「海外企業経営・技術論」、現地企業や県内企業の支社、現地法人を訪問する「海外インターンシップ」などによってプログラムが構成されている。

留学生同窓会上海支部からは今後の展開案として、ホームステイ先の斡旋や、現地企業の工場で生産、開発等を体験するインターンシップのプログラ

ムなどが提案されている。

小野田信春工学研究科長・工学部長は、「今後は専門分野を深く学べる長期プログラムも増やしたい」と話す。研究科はその基盤づくりとして、より多くの留学生を呼び込もうと、学術交流協定の拡大に取り組んでいる。

### 地域の期待を背負い グローバル化の拠点へ

GGJを含む工学部や工学研究科の教育内容には、地元企業の要望が色濃く反映されている。

同大学は地域の人材供給において重要な役割を担っている。大学によると、県内の技術者の約4割が卒業生だという。工学研究科は地元の企業に積極的に共同研究を働きかけたり、繊維工学分野で優れた業績を挙げる企業から講師を招き講座を設けたりと、もともと産学連携に力を入れていた。

このような実績の積み重ねが信頼を生み、大学・企業が相互に支援活動を行う「産学官連携本部協会」には、地元企業が200社以上入会している。そこで企業の意見を吸い上げ、教育内容の見直しに生かす。技術者としての英語運用能力を重視した現カリキュラムも、同様に作られた。

大学はGGJ選定を機に企業との関係をさらに密にしようと、2013年3月、福井商工会議所と包括連携協定を締結。企業が求めるグローバル人材に関する情報交換や共同研究開発の推進など、連絡協議会を設けて話し合っている。

グローバル人材育成に対する企業の関心は高く、商工会議所にも「海外で活躍できる社員育成に向け、福井大学の機能を活用してほしい」という依頼が寄せられるという。「カリキュラムに対するアイデアや要望を聞いてほしい」という声も多く、大学はアドバイザーボードの設置を検討している。工学部、工学研究科は、そこでニーズを把握して、2016年度に改訂予定のカリキュラムに反映させる意向である。

語学センターは、英語教育に熱心な福井県教育委員会の支援も担う。「地（知）の拠点整備事業」（COC）の取り組みとして、小・中・高校教員の英語力向上をめざすプログラム、ALT

（外国語指導助手）の研修プログラムなどを提供している。

寺岡理事・副学長は「東海・北陸地域の国立大学では、本学が唯一のGGJ選定校だ。語学センターはもちろん、大学全体としても地域のグローバル人材育成の拠点になりたい」と話す。

### 海外ベンチマーキングで 教育水準の国際化を図る

福井大学は教学マネジメントの一環として、国際水準による教育の質保証の実現にも取り組んでいる。そのため施策として2012年、学部ごとにモデルとすべき海外先進大学を複数選出

し、ベンチマーキングを行った。

工学部は2013年、ベンチマーク先の一つであったアメリカのブラウン大学からFDセンター長を招き、1週間の滞在中に学部の客観的評価も依頼。授業参観、役員や教員、学生との懇談などを経て、カリキュラム策定、授業評価、ルーブリックの開発、学生に自立的な学習参加を促す方法についてアドバイスを受けた。

同氏による評価は、新カリキュラムの改訂はもちろん、2014年度のスーパーグローバル大学創成支援の申請にも反映された。ベンチマーキング、FDセンター長の招聘共に、今後も継続する予定とのことである。

## column

### 留学生同窓会ネットワークはこう築かれた

#### 10年の歴史を経て世界大会開催

2013年9月、福井大学留学生同窓会の世界大会が開かれた。世界13支部の元留学生、現役留学生、大学関係者ら約100人が文京キャンパスに集合。大学にとっては同窓会設立大会以来の催しだ。各支部からは活動報告に加え、大学に対する多様な協力が提案されるなど、大いに盛り上がったという。

留学生同窓会の発足は2003年。現在は大学が多くの会員と連絡を取ることができるようまでに組織化された。日本人学生の留学やインターンシップを積極的に支援する同窓会の形成は、元国際交流センター教授・中島清氏の尽力に依るところが大きい。

#### 連絡先を入手しネットワーク化

中島氏は留学生に対し、身の回りの世話はもちろん、2001年当時としては珍しい留学生と地元企業の就職支援交流会を

開催するなど、親身にサポートし、大学への帰属意識を醸成した。また、県内の小学校をはじめ各種団体が開催する異文化交流体験や語学教室に協力する機会を提供するなど、地域に愛着を持つ留学生を増やした。「福井のような地方では、都市部に比べて大学の存在感が大きく、地域社会の国際化等に大きく貢献できる」と中島氏は語る。

同窓会発足前後の時期は、各大学が盛んに海外事務所を設置していたが、資源に限りある地方小規模大学にとってはハードルが高い。そこで中島氏は、「留学生が国際的な活動のインフラになってくれるはず」との考えの下、留学生向けの授業の諸連絡、各種活動の参加申し込み、卒業時の届け出など、あらゆる機会を利用して留学生のメールアドレスや住所を取得。卒業後は年1回ネットワーク誌「こころねっ」とを送付するなど、コミュニケーションを継続することによって、最新の連絡先を

入手できる関係を築いてきた。

福井での就職、転職を希望する元留学生に求人情報を配信するなどのフォローを行う一方で、県内企業の海外市場開拓や工場設立時に協力してもらうなど、双方向の支援をし合っている。

中島氏は2013年度に退官したが、国際交流センターには中島氏のノウハウが受け継がれており、今後もより活発な同窓会活動の展開が期待される。



現地を訪れた日本人学生に自身の経歴を話す同窓会上海支部の事務局長

#### 「海外留学ロードマップ」

卒業までの間に留学をどう位置付けるか考えるためのワークノート

